

ズバリ直言

市田 知子

ドイツに来る前、「向こうはソーセイシとジャガイモばかりでしょ」と同情された。

「ふりかけとカレールーを持っていった

方がいいですよ」という入までいた。よほど食事がまずいと思われるのだから。

ここはドイツ北西部のブラウンシュヴァイク市、人口25万人程度の都市である。到着したのは土曜日の深夜、翌日は日曜日なので期待してい

「ドイツ飯」に未来はあるのか

なかつたが、なんと駅前のショッピングセンターが夜遅くまで開いていた。大手スーパーもあり、食料品から日用品、家電製品までそろっている。さっそくカレーライスの材料を買い込んだ。扉間はお世話になっていた研究所の食堂でいわゆる「ドイツ

（イタリア産、500gで2.5ユーロ）、酢、海苔、ガリ、さらに「寿司のスターターキット」まで売られている。売れ行きは定かではないが、とにかく米がいつでも買えるのはありがたい。さて食堂の「ドイツ飯」だが、相も変わらず豚肉のソテー、ソーセ

飯」を食べざるを得ないため、「朝食と夕食くらいは日本にいますと」と同じように」というのが渡独前の希望だった。その希望は、大手スーパーの開店時間延長と「寿司ブーム」のおかげではほぼ実現できている。

アジア食売場には寿司用の米

ーシなどのメインのおかずに、マッシュポテト、ザウアークラウトなどの付け合わせが大皿に溢れんばかりに載せられている。まずくはないが、量が多いのと塩辛いのが難点である。はたして「ドイツ飯」に未来はあるのだろうか。

（明治大学農学部食料環境政策学科専任教授）